

入選

君の待つ場所へ

群馬県 南中学校 二年
窪田 琉良

今年の夏は、猛暑という言葉がぴったりの暑い夏だ。夏休みの部活には満たんの水筒と、スポーツドリンク、予備のお茶も必要だ。

僕が空になったペットボトルを台所に並べておくと、

「自分で片づけなさい。」

の声と共に、ラベルをビリッとはがす音と、ジャバジャバと水の音が聞こえてくる。一日の仕事を終えた台所の水切りラックには、上下逆さまになったペットボトルとキャップが並んでいる。

朝になると、本体はペタンコになってリサイクル箱へ、キャップは専用の回収ボックスに移される。このボックスが満杯になったときが僕の出番だ。

僕の学校では、キャップを回収している。キャップはリサイクル資源になるだけではなく、回収業者に買い取られた金額の一部が寄附され、ワクチンとなって途上国の子供たちに届けられる。

キャップ2キロで一人分のワクチンになるそうだ。あの小さなキャップが約1,000個で一人分。気が遠くなる。どんなに僕が頑張っても、1,000個集めるのは無理だ。そんな気持ちもあったからか、回収日を持って行きそびれた袋づめのキャップが、今はもう山積みになっている。

ある日、部活から帰ると、上の部分を切り取られた2リットルの空のペットボトルが机の上に置いてあった。よく見ると、側面に黒い線が引いてあり、中にキャップが1個入っていた。

母の仕業だとすぐに分かった。いっしょに置かれた紙には、キャップがワクチンに変わるまでの流れとワクチンの種類や金額、必要なキャップ数、そして、ワクチンさえあれば予防できる感染症で命を落としている子供がどのくらいいるのか、が書かれていた。

僕は衝撃を受けた。日本で生まれ育った僕は、必要なワクチンを計画的に接種できる環境にあるから、そのありがたさを忘れてしまいがちだが、世界には守りたくても守れない命があるのだ。

直接募金をすれば、より多くの子どもたちにワクチンを届けることができるのかもしれないが、今の僕にはその力は無い。等身大の僕が何をすべきか。救える命があれば、その命はきっとまた次の誰かの支えになってくれるはずだ。今の僕にできることは、身近なところからできる思いやりの形を見つけることだ。

僕は山積みのキャップを広げ、机の上の手作り計量器で数え始めた。黒い線まで入れると、ちょうど100個だった。7回と3分の1。全部で732個もあった。1,000個あれば、一人の命を助けることができる。そうか、僕は最初から無理だとあきらめていたけれど、中学生の僕でも誰かの命を救う手助けができそうだ。急に嬉しさが込み上げてきた。今までは面倒だと思って人任せにしていたラベルはがしも、分別も水洗いも、今日は全然苦ではない。

ワクチンを待つ君へ。もう少しで君の力になれそうだから、あきらめずに待っていてほしい。

「あら、珍しい。」

僕の心の中と同じくらい、軽やかな声が台所から聞こえてきた。